

Bunkaなう

変わる世界の言語③ ハイテク化

出版物の形も変わった。インターネットでも手軽に利用できるデジタル辞書は、見出し語をたてる必要がない、とっさの点で画期的である。世界の言語ごま、日本語や英語の単語のように語尾の形だけが変化するのではなく、語頭や語中の形が変化するものも珍しくない。たとえばポントック語(Pontoc)の「食べる」という語は、文脈によら(manganj)(kanenj)(kum

世界にはまだ辞書や文法書がない言語が多くある。言語学者は現地へ行き、耳にする言葉をノートに書きとめ、録音する。1993年に私が初めての現地調査で使ったのはカセットテープレコーダー。それが今では、手のひらサイズのICレコーダーだ。音質が良いだけでなく、電池の消耗が少ないため、電気がない調査地でも録音時間を気にせずに調査ができるようになった。ピンマイクの質も良くなり、話し手の声だけがきれいに入る。大事な録音で、犬の遠ほえや子どもの泣き声が語りの音声にかぶってしまった、などという失敗は、いま過去の話だ。

収録した膨大な量のデータを効率よく整理するために、パソコンが活躍する。昔は1単語に1枚カードを作ったというが、辞書作成専用のソフトをつかえば、データの確認も分析も効率よくできる。

国立民族学博物館准教授

菊澤 律子

「ロム」と変化する。辞書の作成にあたっては、見出し語をどう設定するのが悩みだった。デジタル辞書なら、見出し語を考えなくても、知りたい単語をそのまま入力して検索することが可能である。さらに、写真や音声データと関連づけることにより、「読む」だけでなく「見

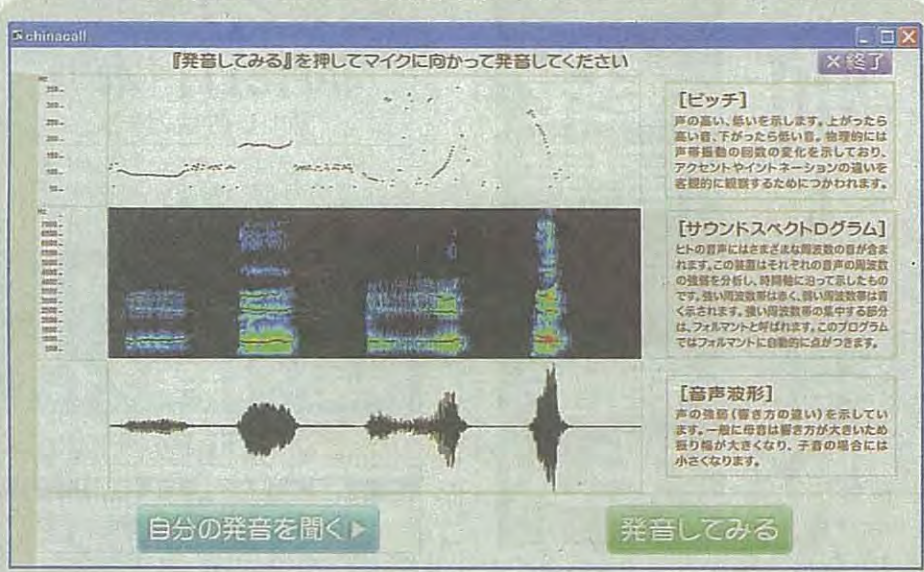
る」「聴く」もできるようになる。音声認識を用いた検索機能は英語ですでに実用化されているから、声で辞書をひくことができるようになって「話す」が加わるのは時間の問題だろうし、応用化がはじまっている画像認識の技術により、カメラの前で動作をすることで単語をひ

検索、研究の画期的進化



きくさわ・りつこ 1967年生まれ。東京大学大学院修士課程修了。米ハワイ大学で博士号(言語学)取得。東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所助手、助教を経て05年から現職。太平洋地域などで話されているオーストロネシア諸言語を研究。国際歴史言語学会会長。

くことができると手話辞典が実現するの、そう遠い未来ではないだろう。その他、統計処理の手法を用いて、言語の系統関係を見直す研究もある。通常は情報処理の専門家と歴史言語学者がチームを組むが、言語学を知らない人による珍説を目にすることもあ。新しい技術も古きを温め



国立民族学博物館(民博)の言語展示場にある「声で遊ぼう」の画面。マイクに向かって単語や文を発音すると、声の上がり下がり、周波数帯、強弱といった特性が画面に表示される—民博提供

第20回国際歴史言語学会(25~30日、大阪府吹田市の国立民族学博物館)の国際ワークショップ「手話の歴史言語学—データベースの構築と一般歴史言語学における展開を目指して」(28日)、国際シンポジウム「アジア・太平洋地域諸言語の歴史研究の方法—日本語の起源は解明できるのか」(30日)は一般公開。無料。申し込み必要。詳しくは(<http://www.minpaku.ac.jp/research/pr/20110725-30.html>)。

なければ生かされない、よい例である。fMRI(機能的磁気共鳴画像装置)を用いて言語活動に関わる脳の部位を観察できるようになり、世界各国の言語の語順を脳の活動と直接結びつけて理解しようとする試みも出てきた。現在のところ脳科学者が中心となっており、意味的特性や心理的要因などの関連要素の影響を考慮してゆく余地はあるが、それでも、私たちの言語に関する知識は確実に増えている。

科学技術の発展により、これまでとは異なる形や切り口で、ことばのこと、そのことを操る人間のこと、そのことを操る人間のこと、この複雑なツールを頭の中でどう操っているのか、そんな疑問が解けるのも、そんなに遠い未来のことではないのかもしれない。